

企画展示「総力戦と戦時体制の時代経験～『戦後70年』を迎えて～」に寄せて

文学部史学科 専任講師 森川正則

2015（平成27）年を迎えて最初の図書館企画展示は、「総力戦と戦時体制の時代経験～『戦後70年』を迎えて～」と題して、1月26日から3月21日まで行われる。この小文では、「総力戦と戦時体制の時代」について研究動向の紹介も交えて概観し、今回の展示内容について述べてみたい。

今年、第2次世界大戦（1939～45年）の終結から70年を迎えた。この途方もなく巨大なグローバル戦争は、ヨーロッパ・大西洋やアジア・太平洋での戦争が連動しながら拡大・展開するとともに、第1次世界大戦をしのぐ凄まじい「総力戦（トータル・ウォー）」となった。総力戦においては、モノやカネ、そしてヒトなど戦争遂行に関わる様々な資源の動員・配分をはかる制度・しくみの構築がはかられる。そのため、自由とされるはずの私的領域、すなわち企業・経済活動や人々の暮らし・労働に公権力（国家）が広範に介入し、統制・計画に基づく戦時体制（総力戦体制・総動員体制）の形成が進む。

第2次世界大戦の発生・展開そして終結については、日本を含む関係各国の政治外交史および国際政治史の分野で膨大な研究が蓄積されている。また、各国の近現代史研究においては総力戦と戦時体制化の衝撃に伴う経済・社会変革の諸相について、戦後にも残される影響・遺産も視野に入れて、多角的・学際的に光が当てられるようになっている。

昭和初期の日本で戦時体制化が本格的に進んでいくのは、日中戦争以降のことである。1937（昭和12）年7月7日、中国（中華民国）の北京（当時は北平）郊外の盧溝橋で発生した日中両軍の局地的な軍事衝突は、全面化の様相を呈していく。以後、日中戦争は1945年まで約8年もの長きにわたって続いた。

今日、戦後という言葉の「戦」について大半の人は、太平洋を舞台とした日米戦争を想起するのではないだろうか。いわゆる「太平洋戦争」である。しかし、日本はすでに4年にわたる戦時体制の中にあつたという基本的かつ重要な点を見逃すことはできない。また、日中戦争の前史として、1931年9月に日本の関東軍が引き起こした満洲事変の衝撃、翌年3月の「満洲国」樹立といった出来事が挙げられる。

満洲事変そのものは、1933年5月に日中間で停戦協定が成立し、終結している。日本政治外交史や中国政治外交史の研究においては、事変終結から日中戦争の勃発までの約4年間、緊張緩和・関係改善を追求する動きが日中双方にあつたことも解明されている。現在の研究水準に照らせば、「満洲事変から日中戦争へ」の道が一直線・単線的であつたとは言い難い。にもかかわらず、日中両国が再び衝突し、しかも全面戦争にまで拡大したことをどう説明・理解すればよいのか。今なお、問われ続けている大きな論点である。



「街頭には男女の学生白布を持ち行人に請ふて赤糸にて日の丸を縫はしむ。燕京出征軍に贈るなりといふ。」(永井荷風『摘録 断腸亭日乗 (下)』岩波文庫、1987年)

これは、作家の永井荷風が書き残した日記の1937年7月17日の一節である。荷風が目にした光景は、日中戦争からアジア・太平洋戦争の時期にかけて、日本の各地で見られたであろう。

今回の企画では壁面ガラスケースで、戦地に赴く出征兵士に贈られた寄せ書き日の丸を2点展示している。同じく壁面ガラスケースには、岐阜県における「外交一新県民有志大会」開催のポスターも展示している。できれば、奈良県における同種のポスターがあれば望ましいのであるが、入手するには至っていないのが、企画担当者としても残念なところである。

平面ガラスケースでは、「Ⅰ. 満洲事変期の関西地域のようす」「Ⅱ. 日中戦争の発生・拡大と戦時体制の形成へ」「Ⅲ. 日中戦争の長期化と戦時体制下の奈良」「Ⅳ. 日中戦争からアジア・太平洋戦争へ」の4つに切り分けて構成した。

そのうち、「Ⅲ. 日中戦争の長期化と戦時体制下の奈良」では、図書館で所蔵する史料8点を展示している。例えば、1940(昭和15)年5月に奈良県がまとめた『国民精神総動員実施概要(第二輯)』からは、「国民精神総動員」の名で行われて

いた戦時行政の内容がうかがえる。同じく1940年といえば「皇紀2600年」にあたり、神武天皇陵や橿原神宮を擁する奈良にとって非常に重要な年であった。奈良県知事が会長を務めた奈良県観光連合会が発行していた雑誌『観光の大和』は、戦時体制下で「観光報国」に努める奈良のようすを今に伝えている。

日中戦争がアジア・太平洋戦争へと拡大したのは、1941(昭和16)年12月のことである。この時期における奈良市の『昭和十六年度歳入歳出決算書』『昭和十七年度予算決議書』からは、戦時下の社会のようすが地方行財政の面から垣間見えよう。



以上、「総力戦と戦時体制の時代」についての概観と研究動向を簡単にまとめつつ、今回の展示企画について述べてみた。最後に今一度記しておきたいのは、日中戦争の発生・拡大・長期化の中で戦時体制の形成が進んでいったことである。では、その実相とは一体、どのようなものであったか。今回の企画展示を通して、その一端に触れて頂ければ企画担当者としては幸いである。

民国年間の中国旅行案内書（『民国旅遊指南彙刊』）

文学部史学科 教授 図書館長 森 田 憲 司

図書館では、『民国旅遊指南彙刊』という叢書を購入しました（全56冊）。この本には、1914年から49年までに中国で出版された中国各地の旅行案内88種類が影印されています。含まれているのは、各都市や観光地、鉄道沿線、海外の華人居住地域の案内記などです。旅行案内といっても、分厚いものは数百ページにもおよびますから、その都市の百科事典とも言えます。

なぜこのような戦前の旅行案内書の集成本が、今になって中国から出るのか、そしてどのような使い道があるのかを、ご参考までに書いてみたいと思います。

同時代の人々が書き残した文章の中に出てくる地名や建造物などについて、具体的に知ることができるわけですから、近代文学や近代史の研究に、直接に役に立つのは当然として、その他にも使える分野があります。

ご存知のように、1949年に中華人民共和国が建国され、中国は新しい社会へと大きく変化しました。その後もいくつもの動乱を経た中国の社会は、すっかり変貌しました。さらに、最近の現代化は、別の角度から大きな変化を社会に加えています。

したがって、私たちが旧中国の文献を読んでいて知りたいと思う事物や光景が、現在では失われていることが少なくありません。清朝までの人が書き残した図絵の類はもちろん役に立ちますが、清朝が滅亡しても、1949年まではそうしたものが

残されていたように感じますので、民国時代の旅行案内も、古い時代の中国を知るのに欠かせない文献なのです。



この種の旅行指南の持つ資料価値について森田はかねて注目し、いささかですが原本を収集してきました。たぶん十数冊は持っているはずですが、ご参考に、原本の書影を次ページに掲載しておこうと思います。

さらに、すこしうがった今回の影印のポイントを書いておきましょう。

1つは、この種の本の値上がりです。

戦前に中国で出版された文献は、ほんの少し前まではそれほど古書価が高くありませんでした。日本には中国語を読む人が少ないですから、あまり需要がなかったからでしょう。日本語の大陸案

内の類と比べれば、かなり安価でした。だから私でもそこそこ収集できたのです。

中国大陸の古物市場でも、まだまだこうしたものへの関心は薄く、中国の物価との関係や円レートとの関係もあって、我々の感覚からすれば、比較的安価で売られていました。

しかし、この数年の間に状況はすっかり変わりました。中国経済の発展で、中国の古書市場は急騰しています。日本にある中国の昔の書物への中国からの需要が高まり、ものすごい勢いで還流しはじめました。とくに、ここしばらくは円安によって加速されて、この種の本の値段は急上昇しています。そもそも、金額以前に今からこれだけの案内書を原本で集めることは不可能でしょう。

もう1つ注目したいのは、1940年代後半に出版されたものが何冊か含まれていることです。1945年の敗戦の後、多くの人々が大陸から日本に引き上げてきました。帰還する人々が書籍を持ち帰ることは困難で、まして地図が掲載されたものについては不可能な状態でした。その後、日中の関係が断絶したこともあって、1945年以降の出版物が日本に入ってくることは極めて限定されていたのです（抗戦地区での出版物はもっと以前のものから）。その時期の出版物が含まれていることも、この本の大きなメリットです。

ところで、この叢書の日本への入荷がはじまって1年以上たつのに、原稿を書いている時点では、CiNiiを検索しても登録がありません。以上のようにメリットの多い本なので、本学が所蔵した意味は大きいと思います。輸入書店がかなり宣

伝している本なので、いづれ購入する機関は出てきましようが、とりあえず、本学が所蔵していることを学界に紹介する価値のある本だと思い、筆を執りました。

そして、さきほど中国は変わったと書きましたが、変わっていない部分も少なくないし、建造物などでも所蔵者や名義が変わっただけで現存するものも少なくありませんから、関心の対象によっては、今の中国を旅するためのガイドブックとしても使えると思います。

ちなみに、戦前の日本でも大陸旅行にかかわる案内記が、JTBをはじめとしていろいろ出版されており、やはり中国を調べる際の重要な資料です。そのことについては、森田の『北京を見る読む集める』に書いていますので、ご参照ください。



後記

奈良大学図書館報第21号をお届けいたします。企画展示ならびに原稿をご執筆いただきました森川正則先生には心よりお礼申し上げます。また、原稿をご執筆いただきました図書館長の森田先生にもお礼申し上げます。

図書館は、B2書庫の増設にともない本の移動があり、次年度は変化の多い年となります。図書館での企画展示にもご期待ください。

(編集担当)

発行：平成27年3月20日

編集：奈良大学図書館 奈良市山陵町1500